

カントの空間論について

田 山 令 史

1768年、カントは「空間における方位の区別の第一根拠について」という短い論文を公にした。この年は教授就任論文が著わされる2年前、そして純粹理性批判の登場するおよそ10年前である。私はこの論考で、この「空間における方位の区別の第一根拠について」（以下「方位論文」と略す）での空間論と、第一批判の空間論、つまり空間の観念性の主張、とをひき比べてみたい。言い換えれば、私の試みる事はこの7ページに満たない「方位論文」に空間の観念性へ向かう議論が現われているのを示す事である。

「方位論文」は永らく論難の、更にはからかいの対象でさえあった。そして、この方位論文から如何にカントは第一批判の空間論へと自己を発展させていったか、という事がカント学者の好個の話題になっていた。方位論文は更に悪い事には、悪名高い不一致対称物に関する議論を含んでいる。不一致対称物とは、右手と左手の様に、形は相同にしてしかも重ね合わす事の出来ない、その様な一対の立体の意味である。カントは右手と左手といった具体的で身近な物を例として用いながら、極めて抽象的な結論、即ち絶対空間の存在を導き出そうとするわけである。カントに批判的な者は、この様な結論が、具体的な個別の例と、カントが述べる様な直接的な結び付き方をし得るかどうかについて、懐疑的である。

私は、カントの議論の進め方、例の挙げ方に何の欠点も弱点も認める事が出来ない。この方位論文と教授就任論文、そして第一批判の間に飛躍はないと思える。もしこの方位論文が未熟な考えのスケッチとして捨てられるべきものであるならば、第一批判の空間論、引いてはカントの観念論自体も同様に捨て去られるべきものであると自分は考える。この小さな方位論文は、我々がその分析を進めるにつれて、堅固な、揺るぎない構成を顕わにしていく。一見、ささいな取るに足りない例なども、注意深い考察に値する。しかし、方位論文は他のカントの著作と同じく、再読しても平板な外見を崩さない。その、注意深く彫琢が施された構造を観て取るには、文章を忍耐強く、くり返しなぞる必要がある。以下にこの作業の結果を述べる。この論文は四つの部分に分かつ事が出来る。まずこの部分わけを示してみる。

1. 方位論文の組み立て

方位論文の主題は、絶対空間というものの探究であり、ライプニッツがカントの論敵である。論文のこの目的を宣言した直後、カントは最初の重要なポイントを提出する。位置というもの

と、方位というものの区別である。カントはこう言う。

……空間の諸部分相互の位置は、それら諸部分がそれに従ってそうした関係に秩序づけられているところの方位を予想するからであって、最も抽象的な意味では、方位は空間内の一つの物の他の物への関係に存するのではなく——それが本来位置の概念であるが——これらの位置の体系の絶対的宇宙空間に対する関係に存する。一切の延長体にあつては、その部分相互の位置は延長体そのものから十分に認識され得るが、諸部分のこの秩序がその方へ向けられている方位はその延長体外の空間に関係し、しかも延長体の場所ではなく——と言うのはこれはまさに同じ諸部分の外的関係における位置にほかならないからであろうから——どの延長でもその部分として見なされなくてはならぬところの統一体としての一般的空間に関係する。読者が、これらの諸概念をまだ甚だ不可解だと思うのは少しも不思議でない、それらの概念も先へ進んではじめて明らかにされるはずのものである¹⁾。

急いでこの点がこの時点では曖昧に見えるだろう事、先に進むにつれて言いたい事ははっきりしてくるだろうことをカントはつけ加える。次にカントは、この論文では絶対空間というのはそれ自身の実在性を持ち、あらゆる物質の存在からも切り離し得るのであり、物の組み立て、合成の可能性の第一の根拠になるものだ、という事を証明する、と明言する。約2ページである。この第一部で既にカントは次の点で自らの空間探究を独特のものとしている。即ち、「位置」の概念にだけ、物と物との、対象と対象との関係に他ならない、位置というものだけに注意を向ける他の哲学者から、カントは出だしから袂を分かつのである。ライプニッツはこの様な哲学者の代表と目されている。

次のおよそ四ページが第二部である²⁾。この第二部の初めで次の事がまず主張される。人が空間における方位の概念を獲得する基礎は、人の体と互いに90度の角度で交わる三つの平面との関係である。或る対象の方位についての判断は、対象と我々の体の面との関係において決定される可能性を欠くと、我々にとって意味を持たない。このカントの主張はこういう事である。つまり、位置についてのありふれた類の知識、例えば、或る物の場所についての知識なども、我々の体の面との関係において対象や対象同士の位置関係を秩序付ける可能性がなければ、我々にとって、ものの役に立たない。例えば「京都」という漢字を紙に書いて、その紙を180度回せば読みにくくなる。「京都」という書かれた文字そのものの各部分の関係は、勿論この回転によって変化しないが、この文字の私の体に対しての関係が変わるからである。これに類した例を呈示している時に、カントは「位置」と「方位」の彼なりの使い方の区別を実地に示している。位置とは、物同士の、あるいは一つの物の内での各部分の空間関係を、方向、方位とは、その物の私に対する（この第二部の範囲では、私の身体に対する）空間関係をいうのである。さて、カントは、ここで夥しい具体例を挙げ始める。人の髪の毛、蛇のとぐろ、豆のつる、等々。これらの例は、自然物の顕著な特徴のいくつかはその物の部分がとる方向に存する、という事を示すためのものである。人の髪の毛は左から右へ、蛇のとぐろも左から右へ巻く。し

かし一方、豆は逆に右から左へとつるを巻く。こういった方向の区別は、至る所で物のしるしとなり、物を我々に親しいものになっている。又、方向の区別は或る場合には、物を区別するよすがともなる。例えば二つの物が、部分の大きさ、部分相互の位置関係を等しくする場合である。カントの挙げる例は極めて多岐に亘っており、月、太陽、といった天体まで言及される。この例の挙げ方からは、まず我々を取り巻く物に視線を向け、次第に天文学的スケールに視野を拡げていく、というカントの意図が伺われる。天体にまで行き着いた後、再び話は我々の体に戻る。右と左の異った感覚が方向の判断に必要なので、我々の体の左右はその相似た外見にも拘らず、感覚の強度や繊細さの点で区別されている。心臓などもこの事に一役買っている事に言い及んで、カントは第二部を閉じるのである。

この第二部は以上の如く、具体性、日常性に富んだ例に満ちている。これらの例から観て取れる事は以下の様にまとめる事が出来る。カントがこの論文で独特の意味を込めて使う「方位」という言葉を完全に理解するためには、我々の体の位置というものを念頭に置く必要がある。我々の体と対象との空間関係が結局の所、対象の位置というものに意味を与える。この事が「方位」という概念に、「私の身体」という概念をその構成要素として含ませる事によって示唆されているのである。

第三部は次の二ページである³⁾。ここに不一致対称物の議論が登場する。この部分は次の言葉で始っている。

それゆえわれわれはつぎのことを証示しようと思う。すなわち、立体的形体の完全な規定根拠は単にその諸部分相互の関係と位置とに基づくのではなく、なおその上に幾何学者が考えているような一般的絶対的空間に対する関係に基づいている、しかもこの関係は直接的に知覚され得ないが、ただひたすらこの根拠だけに基づいているような立体の区別は知覚され得るのである。

このパラグラフは注目に価する。この部分で主題が変わるのである。二つの点が注意を引く。まず第一に「方位」の話が終わり、立体の形についての議論が始まっているという点である。方位の概念についてはもう言及される事がなくなる。第二にカントは、今までの所は我々の身体と外的対象との関係を語っていたが、以後は立体の形と、絶対空間との関係を主題にする。身体と外的対象との関係は知覚する事の出来るものである。しかし、絶対空間及び、その立体との関係については、カントはその知覚可能性を否定する。この関係は直接に知覚する事の出来る様なものではない。が、しかしこの関係によって初めて、第二部で言われた様な立体の特徴の区別、即ち、方向による形の区別が知覚的に可能になる、とカントは主張するのである⁴⁾。

さて、不一致対称物の概念は以下の様に導入される。

まさに同一の限界内には包まれ得ないけれども他の立体に完全に等しくかつ類似している一つの立体を、私は前者の不一致対称物と名づける。さてその可能性を示さんがために、ただ

一つの切断面に対して対称的に配列されている二つの半分から成る立体でなく、たとえば人間の手を取って見られよ。手の表面のすべての点から手に対面して置かれた板の上に垂直線を下してそれをこれらの点が板の前面に存するのと同じ距離だけ板の背後まで延長するならば、そのように延長された直線の末端は、それらが結合されるならば、一つの立体的形体の表面を形作り、その面は前者の不一致対称物である……

カントがここで挙げる例は右手と左手であり、この例を引く目的は、右と左の区別が立体の形の区別にどれ程中心的な役割を果たしているか、という事を改めて強調する事である。このために、これ以上身近なものはない例、つまり、右手と左手が持ち出されるのである。従って、話の主題は絶対空間と外的対象の関係に移ったとはいえ、第二部と第三部は連続性を保っている。

第四部は終りの二ページとする⁵⁾。この短いスペースで結論へ導く議論が提出される。この様に始まる。

完全に類似的でかつ等しくしかも不一致の空間の可能性を理解するためには、以上で十分であろう。われわれは今やこれらの概念の哲学的応用に進もう。

ここで、更に主題にひねりが加わる。立体、あるいは立体の形と空間の関係についての話が、今度は空間の観念についての話に移る。つまり、今は不一致対称物という立体そのものでなく、この立体によって囲まれている空間そのものが注目されているのである。カントは、不一致対称物によって囲まれている空間の差異というものは、或る内的な根拠とでも言うべきものを有する、という。そしてここに難解なパラグラフが来る。天地創造が語られるのである。カントの言う所をまとめるとこうなる。「例え私達が最初の創造物を人間の手だと考えるにしても、その手は必ずや右手か左手である。しかし、今、広く行き亘っている空間についての学説に従うとすれば、右手、あるいは左手によって占められている空間は、“この手が占める所の”空間になり下がり、従って、右手、左手の区別はつけ得なくなってしまう筈である。」⁶⁾

このパラグラフは、方位論文の一つの核心を成す所であり、ここで言われている事の意味は、論文の分析が進むにつれて次第に明らかになってくる。さて、結論が手短かに述べられる。

これからしてつぎの事が明瞭である、すなわち空間の諸規定が物質の諸部分相互の位置の帰結なのではなくて、後者が前者の帰結である、それゆえ立体の性質の中に、ただ絶対的かつ根源的な空間にだけ関係するところの区別、しかも真の区別が見い出され得るのである、なぜかと言えばその空間を通してのみ立体的事物の関係が可能だからであるということ、また絶対的空間は外的感覚の対象ではなくて、外的感覚のすべてをはじめて可能ならしめる一つの根本概念であるがゆえに、われわれは一つの立体的形体の中で純粹空間への関係だけにかかわるようなものは、ただ他の諸立体との対照を通してのみ認めることができるということ、こうしたことが明らかになる。

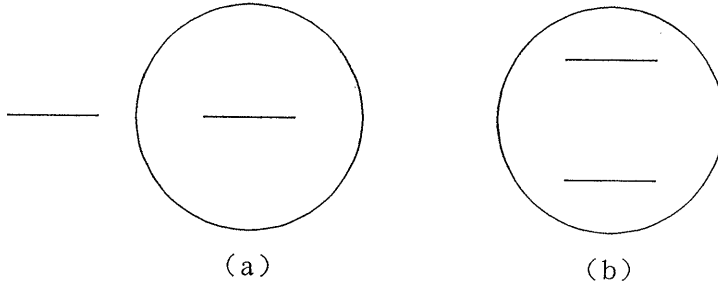
2. 方位論文の一般的解釈

この論文について行き亘っている解釈を見ておく。ローレンス・スクラーと、ピーター・レムナントの論文を代表として取り上げる。レムナントの論文“*Incongruent Counterparts And Absolute Space*”⁷⁾は *Mind* に1963年に発表され、方位論文については決定的な読みとされる事が多い。一方、スクラーの“*Incongruent Counterparts, Intrinsic Features and the Substantivality of Space*”⁸⁾は *Journal of Philosophy* に1974年にのせられたもので、カントの絶対空間にまつわる困難を、空間の次元性を考慮に入れる事によって指摘していこうとしている。スクラーの議論は慎重で、又、カントに批判的な人々によって様々に言われてきたポイントを的確に要約している。まず、スクラーから見ていく。

スクラーは、カントが以下の事を主張している、と考える。二つの立体、例えば、右手と左手の違いは、これらの立体の、空間そのものへの関係において見出される筈である。なぜならば、右手と左手は、それぞれの部分の構成の仕方については同じだから。この空間そのものが、右手、左手の区別の源泉である。右、左の違いは、二つの立体の、絶対空間への異なった関わり方にある。スクラーは、カントが以上の様に主張しているとする。この読み方は、方位論文について大変よく行き亘った、殆んど公式的、とも言えるものである。この、同じ読みに立った上でカントを擁護しようとするグラハム・ネーリッヒは、この解釈をこう表現している。「不一致対称物の一方が他方から区別されるその仕方は、その立体がいかにかこの絶対空間に入るか、という事である」⁹⁾。スクラーは続ける。右手は絶対空間の或る部分と、左手は又、この絶対空間の他の部分と重なり合う。さてこれで、一体何が右手を右手とし、左手を左手として区別しているというのか。唯一可能な答は、この右手、左手と各々重なり合う空間そのものが、右、左の向きを持っているという事に尽きる筈である。では何故この空間の方向性が、手そのものにあって、それらの手を区別しているのだ、と言えないのか。そして、もしその様な右、左の向きの違いといった区別は物そのものに存在しない、というのであれば、一体空間そのものといったものを持ち出してきて、この空間に立体に見出されないという属性を押しつけて何のポイントがあるのか。カントが想い描いているのは、全ての外的対象の容器としての空間である。カントはこの様な空間を絶対空間としているのである。しかし、この様な容器空間に述語付け可能な属性なら、その属性を対象そのものに述語付けて何が不都合か。

このスクラーの抗議は、方位論文を読む者に共通の不満をよく要約している。スクラーはここで更に、この方位論文だけでなく、教授就任論文、プロレゴメナにも登場する不一致対称物の例に対して、面白い反論を開始する。その骨子はこうである。空間の構造というものが、立体の或る属性を決定する際に関わりを持つという事、この事は正しい。そして、もしカントがこの様な極く一般的な事を言いたいのなら、不一致対称物などという奇妙な例は不要である。理由はこうである。仮に、空間が四次元であるとする、あるいは、仮にそれが方向性を持た

ないというのであれば、右手を左手に重ね合わせる様な連続的で飛躍のない動きは可能である。従って、この重ね合わせの可能、不可能は、その立体そのものだけに關わる事ではない。しかし、この事は不一致対称物といったものなしに、簡単に示す事が出来る。スクラーは次の様な図を描く。



(a)の図を(b)の図に変えていく連続的な動きは可能だろうか。図の線分は、円周に触れて横切ってはならないとする。当然、事の可能性は線分が置かれている空間の種類による。もし、空間を二次元とするならば不可能であるし、三次元ならば可能になる。

この様に、カントの絶対空間の現実性へと向かう議論は、ライプニッツをその代表者とする空間の関係論に対しては全く無力である。この空間の関係論の主張する所は、空間とは現実的、可能的な対象の間に成立する、現実的、可能的な空間関係以外の何ものでもない、という事である。この空間についての見方は、空間をあたかも全対象の容器の様に想う素朴な空間についての態度を超えるものである。

以上のスクラーの整然とした議論は、方位論文についての共通の誤解を非常によく表現している。なぜ、又、いかにカントの空間概念がこの種の標準的解釈と異なっているのか、この事をこれから見ていきたい。

この方向に進む前に、レムナントの解釈も紹介しておこう。レムナントも、カントの絶対空間がカントの挙げる様々な現象を説明する力を持っていない事を言う。そして、方位論文の終わりに登場する一文に批判を集中する。この文を、カントの議論全体の奇妙さをよく要約しているものとして取り上げるのである。問題の文は、意識すれば以下の様になる。

「もし、私達が最初に創造された物を人の手だと想像するならば、この物はどうしても右手か左手である。多くの哲学者、ことにドイツの哲学者によって奉じられている空間についての考えがある。それは、空間とは物の外的関係のみで成り立つ、という見方である。この見方に従えばしかし、不一致対称物の、例えば右手、左手の占める空間は“この手が占める空間”となってしまう、この空間では、実は、右、左の区別がつかないのである。従って、この様な空間では右手、左手の区別もないのである。だから、言ってみればこの空間では、手は人の体のどちら側にでも付く事になる。この事が不可能である事は明白である。」¹⁰⁾

レムナントはカントに反対してこう主張する。カントの議論は整合性を欠いている。カントは手については、これを他の全ての物と切り離してこの物だけについて考えた場合、この手は

他の物との関係を全く欠いているという理由で、方向性を言う事が意味を成さず、従って右手、左手の区別も言えなくなると主張する。しかし一方、人体については、それだけで考えられても右側、左側が云々出来る、と言うのである。「カントがこの単純な間違いに導かれたのは、カント自身の奇妙な考え、つまり人は生得的に自分の右側、左側を区別出来て、空間における異なる方位は、この、いわば体感を体の外に投影する事によって区別される、という考えのせいではなかろうか。」¹¹⁾

この、レムナントが不整合だとして捨て去る箇所は、実は凝縮されたライブニッツ空間の批判である。このカントの天地創造にまつわる主張は、安易な思考実験の結果ではない。

さて、まずスクラーの批判から見て行く。スクラーの議論の要点は、空間の話をするにはただ現実的、あるいは可能的な物についてだけ目を向ければよい、という事であった。空間というものを理解するという事は、様々の物がお互いに取り結ぶ様々の空間関係を理解するという事である。この、現実の、あるいは想像上の間の関係を離れて、空間そのものといったものにかかずらう必要はないのではないか。ありふれた現象を素姓の知れぬものに訴える事によって説明しようとする、今度はこの訴えかけたもの自体の存在の仕方を説明せねばならなくなる。際限がなくなるだけだ。

ラッセルはかつて、ライブニッツの空間論を、スクラーが今、カントの空間論として描いた様なものと同様に考えて、その上でこの空間論を批判した事があった。ここでライブニッツの空間論、即ち空間の関係論的見方の説得力を、このラッセルの誤った批判をたどる事を通じて確認しておく。カントが方位論文で標的としているのはライブニッツの空間論なのである。方位論文の理解にはライブニッツ空間の理解が是非必要である。

ライブニッツの空間についての考えが最もよく観て取れるのは、ニュートンの絶対空間に対する反論中である。ライブニッツにとって空間とは先程述べた関係的なもの、つまり、物の織り成す可能的な関係、秩序に他ならない。ライブニッツはニュートンの後継者で代弁者であるクラークとの往復書簡、その第五番目の手紙でクラークに宛ててこう言っている。

「全ての場所を包括したものを空間という。言い換えれば、場所の観念を得るには、つまり空間の観念を得るには、物の関係と変化の法則を考えれば済む事である。この際、我々が考えている物の位置の他に、何か絶対的な實在といった様なものを空想するのは余計である。」¹²⁾

この様に、空間とはライブニッツにとって観念的なもの、知覚され得る対象の間に成り立つ関係に存するものである。この点をラッセルが衝いてくる。ラッセルが言うには、この様な空間概念は、ライブニッツの知覚するモナドはそれ自身の観点を持つ、という主張と相容れない。個々のモナドが各々の観点を持つためには、これらのモナドの占める位置というものが前提する所の空間が必要であらう。客観的空間というものを条件とし、この空間の中でのみ、モナドの主観的空間が成立する筈だから、ライブニッツはこの客観的空間を秘かに前提しているのである¹³⁾。

しかし、このラッセルの抗議は客観的空間というものについて混乱した考えの産物である。ラッセルはこの空間を巨大な容器と想い描いている。ラッセルにとって、例えば「壺の中にある。」という事と、「空間中にある。」という事の違いは念頭になかった筈である。しかし、壺の場合はこれに対して様々の同定の基準を提出する事が出来る。その形、色、等々、そして勿論、その位置である。しかし、我々は一体どの様にして空間そのものを同定し得るのか。その空間の場所を問う、といった事は意味を成さない。ラッセルの考えは、ライブニッツの空間についての批判的な考えに抗する事が出来ない。

では、カントの空間概念は、このライブニッツ空間とどの様に関係しているのであろうか。何がカント空間をラッセルの空間と区別するのでであろうか。ライブニッツに従えば、我々が空間の概念を持つためには、ただ外的対象の関係というものを把握しさえすればよい、という事になる。ライブニッツは説得力ある空間論を提出しているのである。空間はここでは、共時存在の現象の秩序としてとらえられている。そして、空間の現実性に関しては否定されてはいない。カントはいかにしてこの考えに隙を見付けるのか。

ライブニッツ流の関係論を否定する事によってカントを援護しようとする企てがいくつかあった。いずれも不成功である。例えば、アーサー・メルニクはこの様に論じる¹⁴⁾。全く同形の空間が数的に区別されるのは、それらが一つの空間中で互いの外側にある事によってである。このような区別を知るには、結局の所、直観によるしかない。この事こそ、カントが方位論文で主張したかった事である。メルニクの言葉では、対象はその数的同一性というものを、その対象が占める空間と時間の領域から“借りる”のである。メルニクは、方位論文では空間の関係論は完全に拒否されており、従って空間の対象からの、そして主観からの独立存在というものが、カントに残された唯一の道である、と解している。しかし、この空間の、対象からの、主観からの切り離し、という事が、ライブニッツ空間に代わり得る唯一の考えでは実はない。ライブニッツの関係論を、対象と空間の関係については認め、主観と空間の関係については拒否する、という道もある。この可能性は考察に値する。方位論文では、“私の身体”、“私が居る場所”というものがくり返し言及されているのである。

さて、グラハム・ネーリッヒは、“対象が空間に入る”という表現を持ち出してきてカントを弁護しようとする。「不一致対称物の一方を他方から分かちのは、それがいかに空間に入り込んでいるかである。」¹⁵⁾ この見方も空間を、少なくともカント空間に関しては一種の容器の様に考える根強い傾向を示している。スクラーもカントを批判する際、カント空間を容器と見なす。つまり、カントの同調者も、カントの批判者も共に、カント空間については共通の解釈を有している。この点は注目し値する。

空間の関係論に何か弱身があるのでであろうか。カントの言う「一つの立体の形を決める完全な規定根拠」というものの探究は、全く意味のないものかも知れない。いかにしてカントはこの様な探究についての根拠を提出できるのか。言い換えれば、一体どの様にして、この根拠は

提出されるべきもののなか。

ライプニッツの主張の要点は、物が示す様々な外的関係から独立に存在する様な空間、というものは混乱の産物に過ぎない、という事である。この考えを角度を変えて見てみる。物、あるいは対象という語は、ライプニッツの使い方では知覚可能の外的対象を指す。そして、この知覚可能な物というものから考えを始めぬ限り、空間についての考察は根拠を持たなくなる、というのがライプニッツの主張である。これを言い換えれば、空間の関係論をくつがえす可能性は、この一点にある。つまり、この、物、外的対象という概念、関係論にとって土台となっているこの概念そのものに、いわば、クサビを打ち込んでみる事である。自分の信じる所、カントが行うのはこの事である。

3. “方 位”

方位論文の構造を見た時、外的対象というものについての夥しい例が挙げられた後、空間についての議論が始まっているのを知った。この事実には、外的対象という概念に関してライプニッツ流の空間論ではカバーしきれていない何かを見出そうとするカントの意図を窺て取る事が出来る。特に注意すべき点は、論文の第三部から外的対象の形についての話が始まっている事である。第二部までは、方位という概念について説かれていたが、この第三部以降、方位の概念は登場してこない。第四部は、外的対象と区別されたものとしての絶対空間を論じている。従って、こう言える。方位についてのコメントは、外的対象の形についての考察の枕に持ってこられたものである。そして、この形についての議論は、外的対象と区別される絶対空間についての結論付けの議論へと発展していくものである。

カントは方位論文で、絶対空間というものを対象の形の違いの根拠と見ている。では、結局カントは、独立して存在する空間というものに話を持っていかうとしているのだろうか。外的対象から空間というものを切り離そうとすると、ラッセル批判の折に見た様な困難がただちに生じてくる筈である。ここでもう一度、方位論文の組み立てに注意してみる。独立した空間についての話の前では、議論の焦点は対象の形であった。これは何を意味するのか。我々が方位論文を分析した際、右と左の区別が身の回りの見慣れた対象の区別に必須のものとされていた。この観察は第二部に、つまり立体の形の完全な規定根拠についての議論が主題として取り上げられる直前に現れる。カントはこの観察を、立体という概念の内に、方向、方位という概念がその不可欠の構成要素として組み込まれている、という事を強く主張するために使うのである。この第三部の主役は不一致対称物である。一対の対称物の一方が他方から区別されるのは各々の立体の絶対空間への関係による、と言われる。そしてこの関係そのものは知覚出来ない。ここで言われている区別とは、右と左の区別である。言い換えれば方向・方位の区別である。すると絶対空間に基く、と主張される区別とは、つまりはこの方向の区別であると考えてよい。するとでは、空間の関係論者の念頭から欠け落ちているのは、この立体の形に関係する所の方

向，という考えだという事になる。するとこの意味での方向，あるいは方位という考え方が，方位論文でどの様に使われているかを見る事によって，物の形の完全な規定根拠の探究といった企ての正当化の端緒がつかめる可能性が出てくる。

方向，方位という言葉について，方位論文では普通の使われ方にやや変更が加えてある。我々は「私の前に銅像が立っている。」、「その寺は駅の西側である。」といった言い方をする。ここではいくつかの物が言及され，これらの物の間に様々な空間関係が成り立っている。この，物の複数性はカントの考察には入ってこない。方位論文の作りを調べた時，この方向という言葉は或る空間を限る各々の面の方向を語るために使われているのを見た。つまり，“方向”はいくつかの物の間に成立する関係に言及しない。そうではなく，ただ一箇の立体を構成する面の向きというものに注意を促すために持ち出されているのである。

“方向”は一つの立体の面とその向きに，他方，“位置”は複数の立体の間に成立する空間関係に，各々言及する。こう解する事に導かれた。さて，この“方向”あるいは“方位”と“位置”の区別は，方位論文の第一部でまず行なわれていた。この第一部では又，唯一の限りのない空間という考えも導入される。どんな小さな空間も，その外側の空間によって限られている。そして，この限る面は全ていずれかの方向を向いている。これが全ての限られた空間が我々に現われる，その現れ方である。つまり全ての立体が現れる，その現れ方である。さて，或る限られた空間の面に方向を与えるとされる空間は，その限られた空間の外側に，その空間の容器として存在するのではない。もし空間をこの様なものと考えれば，位置を与える空間という概念の無限退行が生じる。従って，カントが「立体は絶対空間の中にある。」と言う時，これは「全ての現実的なものは時間の中にある。」と同様，立体は空間を前提する，という意味である。この空間が方向というものを云々する時に前提されている，この事がカントの目ざす結論なのである。空間の関係論の至らぬ所をカントは探っている。ここで方位の概念が中心的な役割りを果たすようになる。

4. 空間と“私”

方位論文を論う人々に往々にして見落とされている事がある。この論文が“私”という概念を廻っている，という事である。論文の第二部は，我々は方位の概念を我々の体に垂直に交る三つの平面との関係から得てくる，との指摘で始まる。別の言葉で言えば，我々が方位の概念を理解するには，対象と我々の体の間の関係というものがまず意味を成さねばならない。さて，ここに捻りが入る。カントはこの捻りを目立たせず導入するので，一つの補助の言葉，“ここ”を補う。

第二部の焦点は，外的対象と我々の身体の空間的關係であつた。この点は実は注意を要する。何故なら，カント自身，物と絶対空間の關係は，或る対象とその外側の空間の關係の様には知覚し得ないと主張しているからである。第二部の様々の具体例は身体と物との關係に目を向け

させる。しかしこの関係は立体同志の関係、即ち知覚出来る関係である。従ってこの、物と我々の身体の空間関係の総体が方位に、つまりは一つの立体の面の方向というものに意味を与える前提となる絶対空間である、と先走って結論付ける事は出来ない。この、絶対空間は全ての外的対象を包み込む容器の様に対象の外側に存在するのではない、という第一部のポイントと、絶対空間と対象の関係は知覚可能性という事を云々出来る様なものではない、という第三部のポイントを重ねて見る。すると、我々は、我々の身体という物でなく、むしろ“私の身体のある場所”、“私の居る場所”、つまり“ここ”に目を向けるように誘われているのがわかる。実際、方位論文の二年後に現れる教授就任論文で、この“私の居る場所”という表現が使われ始める¹⁶⁾。更にこの“私の居る場所”は、ほぼ10年後に登場する純粹現性批判の議論の皮切り、空間論の冒頭に又現れる¹⁷⁾。これら三つの作品には切れ目のないつながりが迎れるのである。この“私の居る場所”、そしてこの表現と対を成す“私の外”という表現が第一批判で空間論を編み上げていく。又、“私”というものは、いかなる観念論でもその組み立ての中心に据えるものである。

以上の事を念頭に置いて、前述の捻りを見直したい。この捻りは不一致対称物の登場する第三部に至るまでには既に了解済みのものとされている。かつ、不一致対称物の例は、立体の形体の区別には立体を構成する面の向き、方向というものが関わっている、という事を例示するために持ち出されている。従って、とりあえず第三部は今の所、こう読める。立体の形には、私の居る“ここ”が関わっている。そしてこの関わりは、単に“ここ”からは物がかくかくに見える、といった事以上のものがある。そして絶対空間という概念は、“私”という概念をその不可欠の構成要素として持つ様な何ものかである。

5. 私の居る場所

私は“ここ”に居る。私は“ここ”以外には居れない。この“ここ”という概念は、或る特定の場所についての確定記述では代替不可能である。「私はここに居る。」は常に真であるが「私は佛教大学の研究室に居る。」はそうではない。この“私”と“ここ”の二つの *indexicals* の関係は、例えばこういう風にでも言える。「もし自分が“私”と“ここ”の語の内、一つが使えるなら、必ずこの語の他の語に対する意味論的な関係を認める事が出来る。」

最近、この *indexical* という考えが改めて取り沙汰されるようになった。若くして亡くなったガレス・エバンス、そして、オックスフォードのコリン・マギンなどがその代表であろう。マギンが言うには、“私”と“ここ”の関係はア・プリオリであり、もしこれらの語が互いに孤立させられたら、どちらの語も習得できない。これらの語はつまり、相関語である。これらの *indexicals* を用いてなされる世界の描写は、パースペクティブ、観点、視点というものを有している¹⁸⁾。マギンによればこのパースペクティブは或る一個の心理的主体によって所有され、この主体というものは考え、知覚するものだ、とされている。

カントの思う所は、似て非なるものである。カントが“私”と“ここ”の関係に見ているものは、マギンの場合と同様、ア・プリオリな性質である。しかし、後に述べる様に、カントの空間論の要を成すのは、主観と客観、あるいは心理的主体といった考えの出来る限り行き届いた見直しである。カントはマギンの様に、知覚や思考の主体、つまり心、の実体化は避けるが、かといってこの心の実体化が斥けられた世界の、我々への現れ方を描く事は出来ない、といった中途の立場にはいない。デカルト流の心の実体化を斥ける。つまり、心は脳中に位置付け出来るような実体ではない、とする。すると事は、私、あるいは心のあり場所という概念にどう意味を与えるか、という問が片付くまでは結着しないのである。言い換えれば、心の実体性の否定は、私の居場所という自明の事をもう一度問い直す事に意味を与えるのである。「私は私の身体のある場所に居る。」という事実を持ち出してもこれは答にならない。心の実体性が疑われている時、“私”という概念も自明のものとして受け取られてはならない。従って、“私の体”という表現も、解答を与える事に使う事は出来ないのである。カントは心理的主体といったものに目をくれず、ひたすら一つの立体の組み立てに注意を集中する。

6. 物 の 形

どんな外的対象でも、その現れる時には特定の方角に現れ、更にこれが立体である場合には、その立体の面は特定の向きを有して現れる。この向きが決められるのは、この現実の空間では私の体のある“ここ”である。何も知覚の場合に限らず、或る立体、例えば銀閣寺を想い浮かべる場合でも、この思考の対象は特定の視点、想念の中での“ここ”からの見えでしかその姿を現わさない。この様にして“私”というものが一つの立体の形に関わってくる。

ここで、前にレムナントのカント批判を引いた時に見た方位論文の一つのパラグラフを見直してみる。それは、“もし、私達が最初に創造された物を人の手だと考えるにしても、それは必ずや右手か左手か、どちらかである。”という意味のものであった。この天地創造の話は唐突に見えるが、今はカントの意を汲む事が出来ると思う。この一節はこう読める。「何もない所からの創造を想うが如き空想の際でも、私達は立体を形を持ったもの、従って向きを伴ったものとしてしか思えない。つまりどんな想念であれ、それが外的対象を伴う限り“ここ”という視点がつきまとう。かように“私”というものは外的対象の現れに絶えず伴われている。」

この様なカントの読み方は勝手なものではない。この“私”が外的対象の現れに巻き込まれているという主張は、方位論文の第三部で様々の例を伴って提出されていたものである。又、ここでの“私”は、“私の身体”を直接に指すというより、むしろ私の身体のある場所、“ここ”に注意を向けさせる語ととるべき事は、絶対空間の知覚不可能性の主張からの帰結である。

ここで、この絶対空間が知覚不可能であるという事について例をとって考えてみる。今、ここに風景画があるとする。岩や木、雲などが描かれている。望むなら、この絵に何でも付け加える事が出来る。この風景がそこから見られている視点だけは除いて。だからといって、この

絵に視点がない事にはならない。視点そのものを知覚や想像の対象と考える事がナンセンスなのである。視点とは、対象の見え方、風景の構成のされ方によって示されるものである。視点のこの意味での知覚不可能性を念頭に置くと、カントが絶対空間、及び、その対象との関係は知覚できないと言う時、何を意味していたかを推察する助けになる。

先程、マギンの、視点の主観性についての考察を引いて、それとカントの議論との違いを指摘しておいた。ここで、この視点と対象の関連という事について、カントの立場を明らかにするために更にエバンスの考えを引いてみる。エバンスは評判の著、“The Varieties Of References”の中で“私”と“ここ”の相関性を説いている。要点はこうである。「客観世界が存在するという考えと、主観がその世界のどこかに、或る場所に存在するという考えは切り離すことが出来ない。そしてこの、主観がどこに存在するか、という事は主観が何を知覚出来るか、によって決められる。」¹⁹⁾ エバンスはここで、この主観の視点と、その視点より広がる世界の眺め、そしてこの主観の世界で占める位置を概念的に結び付ける事により、客観という概念を主観という概念の構成要素に組み込もうとする。この事により、主観、客観の安易な、しかし根強い分断を見直そうとするのである。この企ては、エバンスの師、ストローソンの個体論の一つのテーマである客観世界の概念分析、その延長上にあると言える。このエバンスの方法とカントの行き方の決定的な違いは、エバンスの場合、視点から広がる“世界”、つまり複数の外的対象が、はじめから考察に入ってくる事である。言い換えれば、エバンスは外的対象という概念そのものは問題視していない。一方、カントは一つの対象が形を持つという事そのものを“私”と関連付けて再考しているのである。つまりカントは外的対象という概念そのものを、絶対空間という考えを通して見直そうとしている。カントはエバンスの様に、様々の対象が様々の角度でもって現れる状況から出発するのではなく、更に進んで目を個々の対象に向けている、と言える。

一つの対象、例えば大文字山は、自分の居る場所が変わるにつれて、その見え姿を変えていく。「私の居る“ここ”にある心が、大文字山の像を受けとめるが、この両者の空間関係が変わるにつれて、山は見え方を変える。この当然の事実のどこに問題とされる様な点があるのか。」ここで問題となる点は、“心がここにある”という表現である。“ここ”とは細かく言えばどこなのか。脑中の松果腺、とはデカルトの答であった。そしてこの答は、心がそれそのものとして時空的に同定出来る実体である事を前提にしている。この前提を拒否するという事は同時に、当然の様に見える事が問題に変わるという事である。山というものがあり、そしてそれと独立に心というものがあり、両者の間の関係如何で山の見え姿が変わる、という言い方は成り立たなくなる。

「私は心あるものとして、ここに居る。」という表現が意味を持つなら同時に、“私の外”の物、この場合、大文字山、のここから見える形についての表現も又、有意味でなければならぬ。言い換えれば、“心のありか”、つまり“私の居る場所”の有意味性には、様々な外的

対象の、特定の角度を伴った見え姿の総体としての“ここ”が不可欠になるのである。又、一方、物、立体の形とは、物を構成する面の向きである。この向きとは、或る角度から見られ、想われる向きであり、この、知覚、想念の“視点”抜きに、形という概念に意味を与える事は出来ない。そして、この私が或る立体を想う場合、その物は必ず想念の中での“ここ”から想われているのである。「そもそも立体が形を持つ、という事は、この私がここに居て、立体を見たり想ったりする事と内的関係などない筈ではないか」。関係はある。まず、私が居る“ここ”から知覚したものでもなく、更には想念の中の“ここ”から想われたものでもない立体の“形”というものを想ってみよ。これは不可能なのである。ここに“私”と“外的対象”の、相即の関係とでも呼ぶべきものがある様に思える。自我と対象の関わりは、視点と対象の見え姿の関連といった経験的な事柄を超えるものを含んでいる。ここで事は、“私”という概念、“物”という概念の相互の有意味性の問題を廻り始めるのである。

カントは、方位、方角を、始めは私の身体と対象との空間関係として、そして、“ここ”と物の関係として、更には、物を構成する面の向きとして論じ、次第にその考察を、“外的対象”と“自我”という概念の内的連関に集中していく。その思惑を、あからさまな形にすれば、以上の様な筋道になろうかと思う。

7. ライプニッツ

風景画の例を持ち出してきて論じたが、この例の示唆する所はこうである。絶対空間と呼ばれているものは知覚の対象ではない、と言われるそのわけは、この空間の概念は、私と外的対象の間の、“ここ”、“向こう”といった関係、即ち、indexical な関係そのものを示唆するからである。自分の知り得た限りでは、ただダイヤモンドだけが、カントの絶対空間を言う時の“延長した対象の外側にある空間”という表現に注目している²⁰⁾。ダイヤモンドはこの“対象の外側にある空間”という表現について、この“外側”というまぎらわしい言葉は、立体の空間的な意味での外側でなく、対象にその前提として先立つ、という意味であろう、と主張する。この見方が正しいように思う。そして、この“外側”という表現は、空間の関係論者、つまりライプニッツにあてた言い方ではないかと思える。ライプニッツは、その空間論を、立体の形体の構造上の違いを司どる法則は全て完全に立体の“内”に見出されるという仮定の上に組み立てていく。この“内”に対するのが、カントの対象の“外側”という言い方である。

カントの批判者、レムナントによって引かれていた方位論文の一節をここで再考してみる。当該の文はおおよそ以下のように要約出来る。「どんな知覚でも、いか様な想像でも、人の手というものは必ず右手としてか、左手としてか現れる。もし我々が、今ドイツの哲学者達に行き亘っている関係論をとれば、人の手の例に登場する空間というものは、“この手が占有する所の空間”になり下がってしまうだろう。そうなれば、これは右手とも左手とも言えまい。」以前、これを引用した際、この箇所は極めて簡潔なライプニッツ批判であると言った。それは、

こういう訳である。カントは、純粹理性批判で、対象の経験的直観の内、ただ延長と形だけが外感の形式として、純粹直観に属する、と主張する。物の形というものは、第一批判ではこの様に基本的なものである。そして、この“形”に意味を与えるには、“私”という概念が欠かせない、この事が方位論文で示唆された事である。前に引用した文は、こう読める。「ライブニッツはこう言うだろう。各々の立体は区別し得る性質の違いを備えている。この違いというものは、これら立体の内に、（もしここで神を言うのであれば）創造の際、神によって植え込まれた、とも言える。即ち、例えば、形体の場合であれば、その違いはそれら立体を見ての通り、完全に立体の内にある。ライブニッツは、この様にして立体の種々の性質を司る規則を見てとる事の出来る物の内に入れ込もうとするが、この事によって“立体”と“私”の見えない関係、両者の間の意味的な関連、を見落としてしまう。この手が占有する所の空間だけを考察しようとする事は、実の所、“物”と“私”との、方位を仲立ちとする関連を無視する事であり、その様な空間は、右も左もない空間、つまりは我々にとっての空間ではなくなってしまふ。」

空間の関係論は、その土台となる外的対象という概念が改めて問われない限り、安泰なのである。カントはこの概念を再考する事によって、関係論を足元から崩す。

以上の考察は、我々の最初の疑問の一つ、カント的空間は、ラッセルの空間とどう区別されるのか、という点に答えるに充分である。カント空間はラッセルのそれと異り、“私”という概念を不可欠の要素として含むのである。次にスクラーの反論があった。これが全く的外れである事は明らかである。カントは、我々のいる、この空間に見出される立体について語っている。スクラーはしかし、二次元の図形を持ち出してくる。そしてスクラーのポイントを知るには、別にこの二次元図形の“私”に対する関係、などという点に考えを廻らすにも及ばない。スクラーはカント空間への入口を見付けられずにいる。

8. 純粹理性批判へ

「我々は（我々の心意識の一つの特性としての）外感によって、対象を我々のそとにあるものとして表象する。つまりこれらの対象を空間において表象するわけである。」²¹⁾（傍点 カント）純粹理性批判の議論はこの言葉で始まる。空間論は全議論の基礎に据えられ、その主役たる空間の概念がこの様に登場するが、ここで、“我々のそと、つまり空間”という言い方が注意を引く。この“我々のそと”は直ちにこう言い変えられる。「空間は、多くの外的経験から抽象されてできた経験的概念ではない。或る感覚が私のそとにある何か或るもの（換言すれば、私が空間において現に占めているところの場所とは異った場所にある何か或るもの）に関係し得るためには、空間の表象がそもそもその根底に存しなければならない。」²²⁾

空間の概念が、“私”、“私が空間において現に占めている場所”、（即ち“ここ”）、“私の外”、これら、“私”を廻る一連の表現の内に包み込まれている。この光景は、方位論文を辿って来た

後では、馴染み深いものである。第一批判では、空間の観念性とは、第一義的に物の延長の観念性として論じられる²³⁾。物が延長を有するとは物が形あるものという事であり、この形の観念性は、形と自我の概念の、絶対空間を通しての関わりとして、方位論文で既に取り上げられていた。

以上で、方位論文と第一批判の空間論の連続性が確認できた。空間論は時間論と対になって初めて完全を期することが出来る。第一批判ではこの事が試みられている。他日、この点を論じてみたい。

以上

注

- 1) 引用は理想社版カント全集, 3. 川戸好武訳. p. 203~204.
独版, Immanuel Kant, Werke In Sechs Bänden ed. Wilhelm Weishedel. Band I. 1960.
p. 993~994 Insel Verlag, 以下 Insel 版と省略。
- 2) 理想社版, p. 205~207, Insel 版, p. 994~997.
- 3) 理想社版, p. 207~209, Insel 版, p. 997~999.
- 4) 理想社版, p. 204, 208を見よ。
- 5) 理想社版, p. 209~210. Insel 版, p. 999~1000.
- 6) 理想社版, p. 209~210. Insel 版, p. 999~1000.
- 7) P. Remnant, Mind, vol. 72, 1963.
- 8) L. Sklar, The Journal of Philosophy, vol. LXXI, No. 9, 1974.
- 9) G. Nerlich, "Hands, Knees, and Absolute Space" The Journal of Philosophy, vol. LXX, No. 12, 1973.
- 10) 理想社版, p. 209~210, Insel 版, p. 999~1000.
- 11) P. Remnant. ibid. p. 398~399.
- 12) H. G. Alexander, ed. "The Leibniz-Clarke Correspondence" Fifth letter, § 47, Manchester U. P. 1956.
- 13) B. Russell. "A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz", XI, London, 1937.
- 14) A. Melnick, "Kant's Analogies of Experience" Chicago and London, 1973.
- 15) A. Melnick, ibid. p. 351.
- 16) Inaugural Dissertation, §15. On space, A. Insel 版, Band III, p. 57.
- 17) 純粹理性批判, B 37~40.
- 18) C. McGinn, "The Subjective View" Clarendon Press, Oxford, 1983, Chapter, 1, 6.
- 19) G. Evans, "The Varieties of References" Clarendon Press, Oxford, 1982, p. 150~170.
- 20) J. Earman, "Kant, Incongruous Counterparts, and the Nature of Space-Time", Ratio, 1971.
- 21) 純粹理性批判, B 37.
- 22) 同 B 38.
- 23) 同 B 35.